

長善館 友の会報

令和7年3月31日
第6号

混乱の時代を生きた長善館



友の会会長

小原 秀一

令和六年度は、予定通りに総会、研修会、学習会、さらに体験教室と活動を行うことができました。ありがとうございました。

長善館主の文臺先生が亡くなったのが、明治三年六月十七日です。江戸の終わりから明治の始めは混乱の時代でした。慶応三年十月に將軍慶喜が大政奉還をし、戊辰戦争が起きます。翌年の慶応四年の五月には、長岡城が落城します。この間にも吉田あたりでは、「打ち壊し」などもあり、相当な騒ぎになったようです。そして、慶応四年九月八日に元号が

慶応から明治に改められます。そんな中で、明治六年四月、長善館

二階で、惕軒先生が関わり、小学校が誕生するのであります。当時、粟生津百六十一戸、下粟生津

百四十六戸、高木五十八戸、上河

原十六戸、野本二十四戸、田中二十五戸、平井新田二十一戸でし

た。明治二十一年には、これらが合併して粟生津村となりました。

江戸末期・明治初期の混乱の時代に、文臺先生が

長善館を経営していたことが分

かります。



長善館史料館収蔵資料 解説学習会

「長善館友の会」では、収蔵史料解説学習会を令和六年十二月七日(土)に開催しました。今回は、長善館の門下生

諸橋湘江の描いた書画幅「寿老人」を取り上げて、解説を加えながら参加者

全員で鑑賞しました。

作者・諸橋湘江は、中之島の生まれで名前を涼作りようさくといい、二歳、西越村柿木の諸橋家の養女となりました。明治二年(一八六九年)十一歳の時、弟大

竹貫一(衆議院議員)と共に長善館に入門し、その後、地藏堂の南画家・富

取芳斎のもとで七年間、長崎へ行って守山湘颯に四年間南画を学びました。

この書画は、作者の恩師惕軒先生が

還暦を迎えた折に、そのお祝いとして湘江が書いて贈ったものです。掛軸に

は、長寿を授けるといふ南極星の精「寿老人」が描かれ、さらに七言の漢詩が添えられています。



▶ 諸橋湘江筆 寿老人

― 読み ―

洞天の香火情に勝えず 南極今に夜々明らかなり 聖主陽剛萬年の寿あり 更に長至に従って長生を祝う 明治二十九年丙申の歳春分の後の一日此の図を雲煙の養寿山房に於いて写し以って聊か鈴木老先生の六十の初度を奉祝す。

門生 湘江涼

― 訳 ―

天の神への焼香の火には、しみじみと感慨深いものがある。南極星は、今でも明るく輝いている。徳の高い立派な惕軒先生は、明るく温かい人柄で意志が強く、たいへん長寿な方でおられる。さらに、屋が一番長い夏至の日にしたがって長生きされることをお祝いします。明治二十九年丙申の年の春分の後のある日、この絵をもやのかかった養寿山房で書き写し、少しばかり鈴木先生の六十一歳の還暦をつつしんでお祝いします。

門下生 湘江涼

〈視察研修会①〉 — 長善館と寺泊のつながりをたどる旅 —

高橋 智文

1. 牧ヶ花 まきがはな

最初に牧ヶ花の解良亮一氏のお宅を訪ねました。解良氏は初代新八郎が黒滝城主山岸氏の家臣であり、牧ヶ花の開拓をして十代になるといふ由緒ある家です。良寛さまと親しい関係で『良寛禅師奇話』という書を残しています。自分はその分家だといっています。

解良家には、「天上大風」という良寛さんの風にかかれていた有名な書があります。その読み方は「てんじょうたいふう」、「てんじょうおおかぜ」、「てんじょうだいふう」の三種類がありますが、この書は長善館の庭の石碑に刻まれています。また、「良寛の健忘症」として良寛さんが忘れものが多いため、持参するものを書いたメモの話があります。これは粟生津の鈴木桐軒の家に残されている話で、良寛死後、『青山帖』として残されています。

2. 寺泊聚感園 しょうはくくかんえん

鈴木桐軒と良寛さんの関係は、医者と患者の関係があります。良寛さんの長寿の秘訣は医者と仲がよかったことです。ひと夏に体調を崩した良寛さんはその体調を見てもらい、処方された薬のお陰で良くなったという漢詩が残されています。

寺泊観光協会ガイドの鳴海忠夫氏の解説を聞きながら見学しました。この公園は屋号菊屋という五十嵐氏の屋敷跡で、戊辰戦争後、五十嵐氏が絶えて公園になったといっています。

その五十嵐伊織氏の墓がこの上にあります。尊王攘夷仲間の柳下安太郎が、明治三年に彼の遺言により隣の墓を建てました。

隣の日蓮宗の法福寺の墓所には良寛さまの妹むらの墓があります。それを囲むように外山氏一族の墓がずらりと並んでいます。昨年

の能登半島沖地震で崩壊してしまいました。

さらに山道を進むと十二神社があります。ここが、鈴木文臺先生が寺泊で開塾したところで、その前は軍の駐留所でした。

3. 寺泊聖徳寺 しょうはくしょうとくじ

現在の住職のお話によりまず、この聖徳寺は浄土真宗仏光派の寺院です。現在の住職で十七代になり、十二代住職は長善館に入門して尊王攘夷に傾倒し、戊辰戦争では官軍方の一員として参加しています。その石碑を見ると、戊辰戦争中は「野埼大蔵」と名乗っていたようです。当時のリスト名は別号を使っていました。高橋竹之介も「北山信」などと称していました。居之隊のことを書いた『越後草莽維新史』（田中惣五郎著）によっても寺泊を中心に五名の名前が上がっています。脇屋式部（中之島大口の出で長埴氏、医者）、柳下安兵衛、外山友之輔などがリストにあります。

この野崎については『拜恩余香』という高橋竹之介の没後、生徒ら

によって発行された漢詩漢文集に出ています。それによると、山形県の角間川の合戦の時に戦死したことが分かっています。聖徳寺では窪沢円一となっています。

4. 野積の南泉院 のんせんいん

当山の開基は禅長法印です。黒滝城の祈願所として始まり、野積浜に永禄元年（一五五八）に転じました。その眼目は長善館の館主となられた鈴木文臺先生が、この南泉院で若いころ一夏を過ごされ、六首の七言絶句の漢詩を作られました。



▲南泉院の見学

南泉精舎寓居の作

青山 空裡の寺に周遭す／海風
快に吹き秋涼を送る／雲晴れて
千里の潮は掌の如し／佐土の嶺
峰一望に竭る

(長善館史料館館長釈文)

お茶を頂きながら紅葉で赤く染まった窓から山容を眺めていました。昔から佐渡がよく見えたようです。

良寛が南泉院の院号にちなみ、「南泉」と題する漢詩を、さらに文臺先生は一八二三年の初夏に十七世良盛による滞留の後、牧ヶ花の観照寺で塾を開き、一八八三年に長善館を開塾されたそうです。

5・五千石の勝敬寺

当寺に深く関係している高橋泥舟（たかはしでいしゅう）の書や書簡などが数多くありますが、それについては読解もまだ出来ていないようでした。当寺からは、千石学と千石徹が長善館へ勉強に行っており、同期入塾をした中之島杉之森の高橋竹之介と交流があります。戊辰戦争当時は千石氏を名乗っていました。

この二人は先年出された『高橋

竹之介関係資料 誠意塾居之隊』に

千石隼人と千石学として出ています。竹之介の長善館入塾は文久二年（一八六二）です。その翌年七月に彼は西国に調査に赴いています。同時期に千石徹が入塾しています。千石学（当時十一歳）、鈴木僧隆（当時七歳）が長善館に入塾しています。

今回調べた竹之介からの手紙は明治二十九年に竹之介の誠意塾に、勝敬寺の鈴木啓基が入塾し、その時に竹之介から入塾のことについて三点のことを約束するという手紙でした。二月六日付でした。

このように幕末から明治期にかけて活躍した人達が、自分の先祖だと思ふと、その事績の調査を継続していることも理解することが出来ます。

雨の中、役員をはじめ関係者の皆様のお陰で充実したものとなりました。今後の調査報告が待たれることとなります。大変ご苦勞さまでした。地元長岡市中之島地域の偉人高橋竹之介の調査が出来たことは得がたいことでした。

〈視察研修会②〉 「長善館」との出会い

串田修平

十年前の事である。教員である妻の赴任地中之口東小学校での在任中、中之口出身の先人「第三十六代横綱羽黒山政司」の生誕百年記念事業が地元先人館で開催されていました。そこで、中之口は言うに及ばず、西蒲原地域の町村長や代議士、県議等名士達が幕末、明治期に長善館で学んだ事を知り感銘を受けました。是非一度長善館を訪ねてみたいと思い続けていました。

平成の終わり頃、その機会を得て感動した次第です。北越の松下村塾とも称される由縁が良く解る史料館となりました。初代塾長の鈴木文臺は、僧良寛に見い出され親交があった事が分かり一層親近感が沸きました。と言うのは、私が学生の頃新大教養部で、良寛研究で知られる故渡辺秀英教授から良寛の講義をよく聴かされたからです。

「裏を見せ、表を見せて、散るもみじ」―良寛―

視察研修会の行程は、解良家分家―聚感園（寺泊）―聖徳寺（寺泊）―昼食―南泉院（野積）―勝敬寺（分水地蔵堂）といづれも歴史と伝統を感じさせる史跡旧蹟であり、歴史の奥深さを感じました。以下行程順に若干の感想を述べます。

◎解良家住宅にて解良良一氏より良寛と鈴木文臺の兄桐軒（医者）との交流話の講話があり、良寛の健忘症の話や「天上大風」の解釈等を学びました。

◎聚感園（寺泊）にて五十嵐家（菊屋）の故事来歴を聞き、感銘を受けました。源義経主従の滞在や順徳上皇の逗留等史蹟としての価値が満載でした。



▲聖徳寺の見学

◎楽波亭跡―最初の鈴木文臺による塾

◎聖徳寺（寺泊）住職の先祖・窪沢円一は幕末に長善館で学び尊皇攘夷運動家として戊辰戦争の際に方義隊（居之隊）を結成し転戦した。

◎南泉院（野積）鈴木文臺との交流、逗留の歴史あり。

◎勝敬寺（分水地藏堂）千石徹・千石学兄弟は、文臺長善館の門下生であり、居之隊の結成に参加し、明治維新に活躍した。

結びに、「縁は異なもの不思議なもの」先週訪問した、寺泊の聖徳寺住職が我家にお出でになったので、驚きました。旧中蒲原郡大江山村松山の「高森山真光寺」住職に代って旧中蒲原郡横越村藤山の「お経講」に來られたのです。本当にビックリしました。

今年の「お経講」の宿が、我家串田家の座敷だった事から、この再会が実現したのです。万分の一の確率としか言いようがありません。これぞ「仏のお導きか」と驚くばかりです。合掌

●長善館小話●

教師鈴木鹿之介の号

「柿園の名前の由来」

長善館の庭園には、多くの種類の木が植えられていたが、鈴木虎雄の「園木雑誌」には、柿の木についての漢詩がある。

「北庭の老柿四三圍にあり、秋晩果の紅白扉に映ず、味澀く凡俗の賞蒙らず、大兄借りて号す意尤微なり」（北側の庭の周囲に古い柿の木があり、奥手の果実の赤い色が白い扉に映って見える。柿の実の味は渋く、一般の人からは賞味されなかった。）兄の柿園がこの柿の名前を借りて号にした。その思いは、とりわけ目立ちたくないということであった。柿園という号は、この柿の木に由来している。柿園は控え目で温和な人柄であったという。柿園は、長善館で学んだあと、上京して啓蒙思想家・中村敬宇に学び、帰郷し、漢学科英学科数学科を備えた近代的な学校として発展していった。柿園の授業は、若者の大きな志を鼓舞し、五年の力リキュラムの修了を待たずに上京する生徒も現れ、桂湖村、小柳司氣太、鈴木虎雄らも上京していったのです。

偉人マンガ・絵本・小説販売中!!

長善館初代館主鈴木文臺の生涯が描かれた「偉人マンガ鈴木文台」のほか、大河津分水建設に至るまでの長善館門下生の活躍を描いた小説、文台と動物たちの物語を描いた絵本が販売中です。

〈販売場所〉

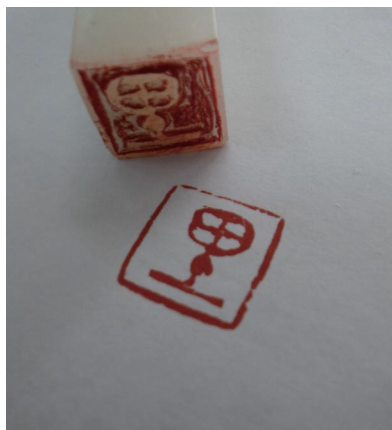
燕市中央公民館、
燕図書館、吉田
図書館、燕市役
所売店



編集後記

今年度は、通常通りの活動に加え、初めて体験教室「旧漢字のハコづくり」を開催しました。来年度も、会員の皆様が楽しみながら学べる企画を考えてまいりますので、ご参加いただければ幸いです。

また、長善館史料館でも様々な企画展がございます。多くの皆さまのご来館をお待ちしております。



▶体験教室「ハンコづくり」

発行 長善館友の会

事務局 燕市長善館史料館内

〒959-0102

新潟県燕市栗生津九七番地

電話 〇二五六一九三一五四〇〇

長善館友の会 新年度会員募集

長善館友の会
は、随時会員を募集しています。

年会費は、個人
会費五〇〇円・事業所会費は一、〇〇〇円です。

年齢・市内外間
わす誰でも大歓迎
です。入会に関する
詳細は長善館友の
会事務局まで。

☎0256-92-7820

●一般印刷●名刺●はがき●封筒●書籍●刊行物

真滝プリント

〒959-0242 新潟県燕市吉田大保町 2-13
TEL. 0256-92-7820

